作・河井友佳

ようそんものがたり
1
遙邨物語
池田遙邨さんは、絵を描くことが大好きでした。
（日課の鴨川散歩中）
スケッチブックを片時も手放さず、何でも描きました。
昨日よりもええ色しとるワ
そんな遙邨さんは、明治28年、岡山に生まれました。
お父さんが転勤の多い仕事だったので、
本名：舜一
0歳
3歳
8歳
14歳
倉敷
福山
大阪
5歳
福岡
8歳
上海
子どもの頃、6回の引越と3回の転校をしなければなりませんでした。
15歳の時、どうしても画家になりたくて、中学校の入学試験を放棄。
仕方のないやつだ
舜一の父
父の友人の紹介で、ついに洋画家の松原三五郎に入門できました。
白いハンカチ
光の具合によって色がちがうところをよく見て、色を塗りなさい。
舜一は一人で大阪に出て、絵の修業を始めました。
2年後には、個展を開くほど頑張りました。
明治45年福山商工会にて
大正2年、2回目の個展を開いたとき、運命的な出会いをしました。
向かいに日本画家が来ているそうだ
→池田家
はじめまして。池田舜一です。
あなたの個展、見ました。
自然はよく見ていますがこれからは主観を入れてみてはどうでしょう。
小野竹喬は、京都で活躍している日本画家でした。
主観か…
見たままを描くのではなく、自分が感じたものを絵にするのは面白そうだがまだむずかしいなあ
舜一は、写生をひたすら続けました。

大正3年、水彩絵の具で描いた《みなとの曇り日》が文部省の美術展覧会（文展）に初入選。

わずか19歳で文展に入選するのは大変なことで、とても注目されました。

翌年、兵隊に入隊しましたが、文展に入選したことが評判になっていました。

2年の間、厳しい兵役を務めながらも、絵を描くことができました。

大正7年。

第1回国画創作協会展
小野竹喬《波切村》

「遙村（のち遙邨と改名）」という雅号を名乗り、初めて出品した日本画は、文展に落選してしまいました。

大正8年、京都へ行き、竹喬の紹介で日本画家の竹内栖鳳に入門しました。

親切な先輩たち

その年の秋、教えてもらいながら描いた日本画が帝展※に入選しました。

《南郷の八月》

（先輩たちは落選しました）

※文展は、帝国美術院美術展覧会（帝展）と名前が変わりました。

その頃、遙邨はムンクやゴヤという画家の作品に魅かれ、彼らのような暗い絵を描きたいと思いました。

大正12年、関東大震災が起こった東京へ行き、400枚もスケッチをしました。

しかし、震災の悲惨な様子を描いた《災禍の跡》は、帝展に落選。

栖鳳先生は、そんな遙邨に言いました。

遙邨は京都を出ました。

栖鳳先生にぼくの芸術が分かるもんか！

妻

岡山、倉敷を放浪しました。作品は、再び落選しました。

住むところがない。

お金もない。

子どもも生まれる。

考えた末京都に戻りました。

神社やお寺で古い作品の模写※にはげみました。

特選の絵でも描いてやる！

※芸術作品などをそっくりそのまま写し取ること。

大正15年、画風をがらりと変えた《南禅寺》は、帝展で再び入選を果たしました。

幅2.5メートルの大作《南禅寺》

池田君、いい絵やった。もう少しで特選やった。

へえ、そうですか

洋画を描いていた頃熱心だったように、日本画に転向してからもますます写生の旅が盛んになりました。遙邨は、日本中を旅しました。

旅は枕灯消したあとの波音　遙邨

遙邨は、「旅は画室の延長だ」と考え、家にこもって絵を描くだけでなく、あらゆる場所を歩きながら描きました。

北海道（昭和5年）

日光（昭和2年）

東京

東海道

京都

紀州（昭和8、13年）

南海道（昭和4年）

四国（大正12年、昭和7年）

中国（昭和15年）

九州（昭和17年）

歌川広重にあこがれて、東海道は3度も旅しました。

泊められないね

困ったな

一稼ぎせんか？

こいつから早く逃げたい！

滝つぼに溺死者

あーん

この自然の何とも言えない感じは、旅ならではのものだなあ旅っていいなあ！

美しいなあ

あっ 山百合が…

ソフト帽

はっぴ

写生帖

手ぬぐい

傘

ざつのう（かばん）

ももひき

地下たび

遙邨の旅装ハッピスタイル

遙邨の絵の世界は、とめどなく広がりました。

冨田溪仙に影響を受けた頃。

溪仙先生が描く絵はすばらしい。

冨田溪仙《御室の桜》昭和8年

ニュースを知ってひらめいた絵。

「海底火山噴火」

!

《幻想の明神礁》昭和27年

童話のようなメルヘンチックな絵。

《森の唄》昭和29年

昭和28年、画塾「青塔社」をつくり、弟子も育てました。

「われら未完の青二才」で青塔社という名前になったのです。

一つの対象を徹底的に見つめて描いた落ち着いた絵。

《石》昭和32年

ぼくも、いつかこんな絵を描きたいなあ

1000枚も石を写生しました。

小野竹喬《奥の細道句抄絵》10点のシリーズ　昭和52年

こんな構図はどうだ…

小下絵の山

遙邨独自の視点でとらえた絵。

《錦帯橋》昭和55年

ぼくと同じように旅に生きた大好きな詩人、種田山頭火の句を絵に描こう…

若い頃たくさん旅をして、色々なものを見てきた遙邨は、いくらでも絵が浮かんできました。

昭和59年 89歳

昭和63年に92歳で亡くなる直前まで、絵を描き続け、28点もの山頭火シリーズを生み出しました。

120歳まで生きるぞ～

文化勲章

若々しく生きる秘けつは、仕事、恋愛、個性的な服装、好きなことを一所懸命やることだよ…

あれ、おもしろいな

これもおもしろいなあ

入院中でも写生ばっかり。

おしまい

え・ともか